

海外事務所  
だより

ラオスとの「人づくり交流」  
舞台裏

シンガポール事務所所長補佐 坂本 篤紀(奈良県派遣)

シンガポール  
事務所

「人づくり交流」

ラオスとの協力関係と交流

ラオスは、日本の本州とほぼ同じくらいの面積に約五六〇万人が住んでおり、東南アジア諸国の中でも小さな国に属します。日本人にとっては、必ずしも知名度の高い国ではありませんが、今日、両国間には、さまざまな分野において協力関係が築かれています。

「人づくり」への協力という点では、二〇〇四年度末までの累計で五二九人の青年海外協力隊員がラオスに派遣されています。その歴史は古く、一九六五年の協力隊発足時、最初の派遣先がラオスでした。また、在ラオス日本国大使館によると、二〇〇六年六月時点で、日本のNGO九団体が事務所を設置し、一七人の日本人スタッフが教育、保健衛生などの分野で活動を行っています。

このよう

な協力関係だけでなく、地域レベルで相互に交流を深める取り組みも行われています。

特に、二〇〇五年はラオ

スとの外交関係樹立五〇周年ということもあり、これを記念したさまざまな交流イベントが両国で開催されました。

シンガポール事務所では

当事務所では、日本の自治体関係者との交流を行う海外自治体幹部交流協力セミナー、海外の公務員を日本の自治体で受け入れる自治体職員協力交流事業、日本の自治体職員を専門家として派遣する自治体国際協力専門家派遣事業など、ラオスの関係機



関と協力しながら、自治体の持つノウハウを活かしたプログラムに取り組んでいます。このようなプログラムは、ラオスにおける各分野での「人づくり」への協力だけでなく、日本の自治体とラオスとの交流のきっかけとなる、または関係を強化することを目指しています。今回は、そんな「人づくり交流」にまつわるエピソードを紹介します。

日本からラオスへ  
専門家の派遣

絵本を楽しむ子どもたち

先日、ラオス南部のサワンナケート県にある県立図書館を訪れました。絵本を読んでいる子どもたちの周りには、本だけでなく子どもたちが描いた絵、折紙を使った飾り付けがあり、室内には発表用の小さな壇までありました。例えるなら、日本の小中学校の図書室と児童館を合わせた感じで

しようか。訪れたのは平日でしたが、学校が休みになる土曜日には、多くの子どもたちが訪ねてくるそうです。

### 司書の派遣

この図書館では、従来大人を対象としたサービスのみを提供していたのですが、新たに子ども向けのサービスを行うことになりました。そこで、二〇〇三年一二月にそのような経験のない現地の司書に技術指導を行う専門家として、名古屋市の職員司書二人が派遣され、絵本の読み聞かせ、行事用ポスターの作成や館内の飾り付けなどをテーマに研修を実施しました。

### 子どもに親しまれる図書館を目指して

それから二年ほど経過しましたが、今でもそのときの経験に基づいた取組みが行われています。

当時研修に参加したアーサパントーン館長は、「絵本、歌、紙芝居、クイズなど、子どもの興味を引きつけるためのイベント企画のノウハウは現在でも活用している」と話しています。このようなイベントは毎週土曜日に開催されており、来館者の増加に役立っています。同図書館の運営を担当しているサワンナケート県情報文化局によれば、二〇



↑ラオスでは、ラオス語の出版物が少ないことから、蔵書不足という問題も抱えている。

○五年の年間来館者数は二万六七一四人で、前年と比較して三〇%以上増加しており、来館者に占める子どもの割合も高まっているそうです。

子どもたちに一層本と図書館に親しんでもらうため、館長は、学校訪問の回数を増やしPRを行うこと、日本の例に倣って月曜日を休館し日曜日に開館すること、などを考えています。専門家から指導を受けた経験を活かして、館長のいう「子どもに親しんでもらえる図書館づくり」を自らの手で進めています。

## ラオスから日本へ 協力交流研修員として

コミュニケーションの大切さ、日本語との戦い

首都ヴィエンチャンの中学校で英語を教えているカンペット教諭は、自治体職員協力交流事業の協力交流研修員として、二〇〇五年五月から約半年間を日本で過ごし、主に静岡県で教育分野に関する研修を受けました。ラオスへ戻ってきた本人に、「最も



↑アーサパントーン館長(左)とブアライ副館長(右)。2人とも当時の研修参加者。

大変だったのは？」と尋ねたところ、「日本語でのコミュニケーション」との答えが返ってきました。

もともと日本での研修を希望していたカンペット教諭は、このプログラムに参加することが決まっていたから、独学で日本語の勉強を開始しました。しかし、日本へ来た当初は苦戦の連続。できるだけ日本語を使うように指導されたカンペット教諭は、「話すのが苦痛だった」と当時を振り返っています。しかし、静岡県での専門研修が始まってから一念発起。もつと勉強をしなければとの思いから、夜の二時まで勉強して仮眠、朝の三時から六時まで再度勉強という生活を続けました。そのおかげで聞き取り能力がずいぶん向上したそうです。

### スタッフ・友だち・住民とのコミュニケーション

そんなカンペット教諭にとって頼りになったのは、受入先のスタッフと研修で知り合ったほかの国から参加している研修生の仲間でした。電話やEメールで頻繁に連絡をとりあっていたそうです。静岡県や当協会のスタッフにも

「とてもお世話になった」とのこと。特に、静岡県のスタッフからは、来日前からEメールによる



↑カンペット教諭(中央)は友だちやスタッフに恵まれたとのこと(左はタイからの研修生、右は当協会スタッフ)。

サポートがあり、実際に顔を合わせる前からよい関係を築くことができました。

また、地域の祭りやイベントに出席し、ラオス文化の紹介を通じて住民と交流を深めるなど、研修生として学ぶだけではなく、住民とのコミュニケーションを通じて、県の地域レベルでの国際化にも貢献できたようです。

## 英語教育もコミュニケーション！

そんなカンペット教諭にとつて、最も印象に残ったのは日本の英語教育に関する研修でした。「以前の文法読解を中心にする指導法と、今のコミュニケーションを重視した指導法と両方を知ることができたのが収穫だった。新旧の方法を比較することで、現在のコミュニケーション技術に力点を置いた指導の必要性、重要性がよく分かった」と言っています。

英語と日本語の違いこそあれ、自らコミュニケーションで苦勞した経験が、今後の英語の授業に反映されることでしょう。「将来は日本語も教えたい」というカンペット教諭のこれからの活躍を期待したいものです。

## ラオス国内では 人選のあり方

### 行政公務員庁による選考の場合

ところで、このようなプログラムへの参加者はどのように選考されているのでしょうか。当事務所が担当しているプログラムの参加者を決定する際、その選考を行っている行政公

務員庁公務員管理局のニシス副局長に選考時のポイントや課題を聞いてみました。どの地域から派遣するか

それぞれのプログラムのテーマや研修分野に対し、国内のどの地域から職員を派遣すべきかを慎重に検討しています。ラオスでは、地域によって、地理的状況やインフラの整備状況など広い意味での環境面の差異が大きいため、適切な地域から適切な職員を派遣しないと、帰国後に成果を還元することが難しくなるからです。その結果、最近では都市部からの参加者が増えています。副局長にはさまざまな地域の職員を参加させたいという思いもあるようです。



↑公務員の人材育成を担当するニシス副局長。自身も当事務所のプログラムへの参加経験がある。

### 英語を話せるか

多くのプログラムでは英語能力が参加要件となっています。副局長は、「語学能力だけに着目して選考することはない」と、あくまでセミナーや研修のテーマに精通しているかどうかを優先しているようです。しかし、ヴィエンチャンで勤務する各省庁の職員はほとんど英語を話しますが、地方になればなるほど英語を話せる職員は減少します。その結果、プログラムに参加させたい職員が必ずしも英語が得意ではないため人選に苦慮

するそうです。成果を活用できるか

こうして選考された参加者は、プログラムで得られた成果を国内に還元しなければなりません。「これらのプログラムへの参加者はただ参加するだけでなく、その後、いかにラオスの国づくりに貢献できるかが重要である。日本の自治体が開催するプログラムには日本国民が支払った税金が投入されていると聞いている。われわれは、日本の国民に大変感謝するとともに、それだけ成果が問われていることをもつと重大視すべきなのだ」とニシス副局長は言っています。

## より効果的な「人づくり 交流」に向けて

今回、アーサパントーン館長やカンペット教諭から話を聞く中で、プログラム参加者が、強い意欲を持って参加していることをあらためて感じました。また、先ほどのニシス副局長の言葉に、副局長の熱意とともにプログラムを担当する私たちへの大きな期待を感じ、身の引き締まる思いがしました。

これらの意欲や期待にこたえていくためにも、私たちシンガポール事務所としては、ラオスに限らず、今後とも、プログラムの成果や参加者の生の声の把握を通じてプログラムの内容改善に努めつつ、日本の自治体との「人づくり交流」を推進していきたいと思

# 海外生活 だより



シンガポール事務所

## シンガポール 選挙運動観戦記

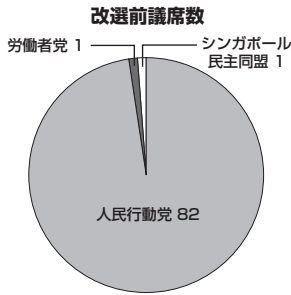
シンガポール事務所所長補佐 脇本 篤 (総務官派遣)

シンガポールでは、去る五月六日、五年ぶりに国会議員の総選挙が行われました。シンガポールは都市国家で、地方自治体は存在しませんし、また、国会も一院制です。で、実は選挙自体行われることが少ないのです(注1)。

このような限られた機会に巡り合わせた幸運に感謝しつつ、シンガポールの選挙運動を垣間見てきましたので、簡単にご報告します。

今回の総選

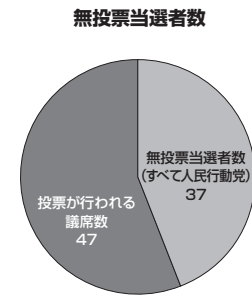
挙は、リー・シェンロン首相の就任後(注2)初の総選挙で、国会で与党人民行動党(People's Action Party)が



圧倒的多数を占める状況下、実質的には、リー首相の信任投票の色合いが濃い選挙でした。

改選前のシンガポールの国会における政党勢力図は、総議席数八四議席のうち実に八二議席を与党人民行動党が占め、残りの二議席を労働者党(Worker's Party)とシンガポール民主同盟(Singapore Democratic Alliance)の野党(注3)がそれぞれ一議席ずつを分け合うといういわば一党独裁に近い状況でした。しかも、シンガポールでは、無投票当選となる選挙区が多く(注4)、今回の選挙においても、八四議席中三七議席は無投票当選で、その

投票当選となる選挙区が多く(注4)、今回の選挙においても、八四議席中三七議席は無投票当選で、その



当選者すべてが人民行動党でした。

シンガポールでは一九五九年に普通選挙が導入されて以来義務投票制(注5)をとっています。前述のとおり無投票選挙区が多いため、選挙権を有しながらこれまで一度も投票をしたことがないという国民も多い上、選挙区の区割り改定(注6)が総選挙の直前に行われることもあり、選挙直前から選挙期間にかけて、有権者が混乱を来さないよう頻繁にテレビ等マスメディアを通して投票方法を説明する告知が行われます。

筆者は、まずは夜の街頭演説の傍聴に出かけてみました。手始めに野党労働者党の街頭演説から傍聴しました。八四議席中一議席を有するだけの党であるにもかかわらず、会場はかなりの活気を呈しており、会場付近は一部交通渋滞すら起きるほど盛況でした。候補者のかけ声に唱和する人々、労働者党の旗を買い求める人々など野党支持者も意外に多く存在することに驚きを感じつつ、筆者はその足で、車で一〇分ほど離れた与党人民行動党の街頭演説会場へと向かいました。

人民行動党の街頭演説には、ゴー・チョクトン前首相が出席していたにもかかわらず、先ほどの労働者党のときのような活気があまり感じられ



↑労働者党の旗を買い求める人たち



↑電柱に張られた選挙運動用ポスター(上:人民行動党、下:シンガポール民主同盟)



↑熱弁を振るうゴー前首相

ません。そもそも聴衆の数が労働者党の街頭演説の10分の1にも満たなかったのではないのでしょうか。おのこの演説会場までの交通の利便性などの違いはありましようが、この日の街頭演説の盛況ぶりに関しては与野党が逆転していたと言えるでしょう。

前述したように、都市国家であるシンガポールでは、国会が唯一の議会ですので、国会議員といえども日本の地方議員のような存在でもありません。そのため、総選挙においても、国防や外交などのほか、住民に身近なテーマ、例えば、公営住宅の建て替えやリノベーションは毎回選挙の争点になります。国民の八四%が公営住宅(注1)に住むシンガポールにおいては、公営住宅の改良は生活に密着していることだけに国民の関心事の一つなのです。今回の選挙戦において

も、与野党が公営住宅に関するおのこの主張を述べていきましたが、現状は、与党選出選挙区の公営住宅に比べて、野党選出選挙区のそれは大幅に建て替えやリノベーションが遅れているとも言われています。

翌日は、当シンガポール事務所近くで、昼食時のビジネスパーソンを狙って人民行動党の街頭演説が行われました。筆者も事務所の昼食時間を利用して傍聴に出かけました。そこにはリー・シェンロン首相も出席していました。さすがに現職の首相が出席するだけあって、前夜とは異なり、ここでは多くの人が垣ができていました。熱帯に位置するシンガポールの真昼の厳しい蒸し暑さと強烈な日差しのため、多くの人は日傘を差して傍聴していることから、首相の姿は傘の合間から時折見える程度でした。あまりの暑さに耐えかね、事務所の昼食時間が終わりに近づきつつあったことをいふことに、演説途中ではありましたが筆者はその場を後にしました。

その後の選挙結果につきましては、与党の人民行動党は、前回の二〇〇一年の総選挙で七五・二九%を誇った得票率を今回の総選挙では六六・〇六%と八・六九ポイント低下させたものの、改選前の議席数八二



↑リー首相を傘の合間から望む

議席を維持しました。野党の労働者党およびシンガポール民主同盟も、それぞれの改選前の議席数を維持しましたが、筆者が夜の街頭演説で垣間見た活気強さとは裏腹に、その数を伸ばすことはできませんでした。政権与党の政見に比べて野党のそれに普段触れる機会はその多くはありませんので、選挙期間中には与党よりもかえって野党の街頭演説に人が多く集まっていたのかもしれません。

選挙結果から察すると、国民の投票行動としては、野党の政見に関心はあるものの、独立後四〇年にわたってシンガポールをASEAN地域ではほかに比肩するものがない豊かさを有するまでリードしてきた実績と今後に期待し、最終的には与党人民行動党に引き続き政権を委ねたものと思われれます。

(注1)大統領も公選ですが、前回二〇〇五年は無投票当選でした。

(注2)二〇〇四年八月就任。

(注3)野党には、議席は有していませんが、シンガポール民主党(Singapore Democratic Party)も存在します。

(注4)無投票当選選挙区が多い理由および背景については、当協会発行「クリアレポート(第三二一号)」をご参照ください。

(注5)正当な理由なく棄権した場合、選挙人名簿から削除されます。再登録を行うには五シンガポールドル(シンガポールドル七〇円換算で約三五〇円)を支払わなければなりません。

(注6)当概年の一月一日現在の有権者数に基づいて改定されます。

(注7)シンガポールの公営住宅に関しては、当協会発行「シンガポールの政策(二〇〇五年改訂版)」(<http://www.clair.or.jp/j/forum/series/pdf/21.pdf>)を参照ください。